

新型コロナ「オミクロン株」は“強毒化”したのか…東大などのチームが発表した驚愕の論文 2022/6/4 日刊ゲンダイ



また猛威を振るうのか。東大などのチームが発表した論文が衝撃を与えている。

発表された論文によると、新型コロナウイルスの変異株「オミクロン株」のうち、現在、南アフリカで拡大している新系統「BA. 4」と「BA. 5」は、日本国内で主流となっている「BA. 2」に比べて、“感染力”も“毒性”も強いという。

■南アで流行「BA. 4」「BA. 5」 南アフリカでは、「BA. 2」から「BA. 4」や「BA. 5」への置き換わりが進み、いったん減少

した新規感染者が、再び増加している。日本国内でも4月以降、空港検疫で検出され、「BA. 5」は市中感染も確認されている。岸田内閣は、入国規制を緩めているだけに、これから日本でも主流となる可能性がある。

以前から“感染力”の強さは指摘されていたが、驚きなのは“毒性”まで強いとしていることだ。ハムスターにウイルスを感染させる実験をしたら、「BA. 2」への感染よりも体重が減少する割合や、肺の組織が障害を受ける程度が大きかったという。世界保健機関（WHO）は、入院にいたるリスクについて「BA. 2」と差はないとしているが、やはり重症化リスクは高いのだろうか。

医療ガバナンス研究所の上昌広理事長がこう言う。

「南アフリカで『BA. 4』や『BA. 5』への置き換わりが進んでいるということは、感染力は強いのでしょう。でも、病原性（重症化リスク）が高いというのは、ちょっと疑問です。南アフリカでは重症化していないからです。WHOの見解も同じです。歴史的に見ると、ウイルスは変異をくり返すと弱毒化していく。弱毒化しないと流行しないということもあります。ロックダウンした上海のデータは興味深い。大規模検査を徹底的に実施した結果、95%は無症状だった。新型コロナの流行から2年経ち、感染とワクチンによって、中国だけでなくアメリカや他の国でも、多くの人々が免疫をつけた可能性がある。いずれにしろ、**現状ではあまり強毒化を心配しなくても大丈夫だとは思いますが**」

ただの風邪に近づいているのだろうか。

尾身会長“白旗”無責任発言のア然…コロナ対策トップが国民に自己責任促しまるで評論家：2022/04/18 日刊ゲンダイ

政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会の尾身茂会長が15日、共同通信の単独インタビューに答え、東京新聞や神戸新聞など契約紙に一斉に掲載されていたが、その中身には驚いた。コロナ対策の専門家トップという自らのポジションをすっかり忘れ、評論家のような無責任発言のオンパレードだったからだ。

「社会活動を完全に止めるようなオプションはないのではないか。対策は新しいフェーズ

(局面)に入った」

完全に人流を止めて(街から)人がいなくなる光景にすることはもうないだろう。感染リスクの高い状況を賢く避けてほしい」

「4月末からの大型連休でさらに感染者が増え、高齢者のワクチン3回目接種の効果が下がる6月ごろ、重症者が増える可能性がある」

オミクロン株は重症化リスクが比較的低いとしてこうした発言が出たようなのだが、岩手や宮崎など9県で、今年12日までの1週間の新規感染者が過去最多を更新している。感染力の強い「BA.2」への置き換えや、その「BA.2」より感染者の増加速度が12.6%高いという「XE」の拡大に首長らが危機感を強めているのに、「感染リスクの高い状況を賢く避けて」と自己責任を促すのは、専門家として“白旗”を掲げているようなものだ。

■上昌広氏は「もうお辞めになったら」と

「6月ごろ、重症者が増える可能性がある」とシレッと発言しているのも看過できない。ワクチンの3回目接種の遅れが高齢者施設でのクラスターを頻発させ、医療が行き届かず命を落とす“手遅れ死”が多発した。重症者を増やさない対策を考えるのが専門家の仕事ではないのか。医療ガバナンス研究所理事長の上昌広氏が言う。

「もう会長をお辞めになったらどうでしょう。判断材料を提供するのが科学者であり専門家なのですが、尾身氏の発言は一般論ばかり。過去にも『気の緩み』などと言ったことがありました。3回目接種が遅れたのは、昨年9月にすぐ動かず、尾身氏らが『慎重に議論を』とブレーキをかけたからです。そのため日本は、欧米のような感染ピークに合わせた接種からタイミングがズレてしまった。評論家のような発言を繰り返すのではなく、こうした失敗について自ら説明すべきですよ」

尾身氏がズルズルと会長に居座っていることで、岸田政権のコロナ対策への本気度も分かる。